校長のつぶやき

校長室便り　第２５号　　令和元年８月２６日　山内

○8 月 ２３日　芸術鑑賞会
－古典芸能「学校寄席」－

23 日（金）朝方の雨もあがり，会場のスコーレーハウスに移動の際には暑さも感じられました。令和最初の岩高芸術鑑賞会は，「学校寄席」でした。「落語入門」では高座やめくりなどの舞台上の説明や出演者の紹介がありました。落語の演目は現代的なものから，古典的なものまで日本人らしい「人情話」が光りました。体験コーナーでは菊地生徒会長や安西先生が飛び入りして，センスや手ぬぐいを使って食べたり・吸ったりする演技で会場を盛り上げてくれました。「色物」として組み込まれた紙切り芸も，軽妙なトークとともに，成果物には感嘆の声と大きな拍手が送られました。

芸術鑑賞に限らず，政宗公まつり，岩高祭，創立９０周年式典等２学期には授業以外の全校行事が数多く行われます。先生方から「休まないように」と指導されていると思います。どうして行事を休まないで出席すべきなのか，それは簡単です。それは人生を変えるような話，作品，人との出会いがあるからです。授業以外の教育活動を安易に休む人はその可能性を自ら捨ててしまっているのです。自分も周りの大人も限界を作らなければ，岩高生には無限の可能性があるのです。

○令和の怪物・奥川投手　－本当の人間力－

「科学の甲子園」「短歌甲子園」「料理甲子園」これらすべて，この夏高校生対象の全国大会名ですが，本家本元は硬式野球大会であることは皆さん知っていると思います。夏の甲子園決勝で敗れたものの，私が最も印象に残ったのは，昭和の作新学院江川投手，平成の横浜松坂投手と並び称される令和の怪物こと石川星稜の奥川投手です。１５０Km を超す速球が示すとおり投手としての力量は言うまでもないのですが，試合中の振る舞い方，報道への受け答え方，どれをとっても「人間力溢れる」素晴らしい人柄が伝わってきました。決勝で敗れたものの，試合直後，奥川投手の目に涙はありませんでした。ただ敗戦に落胆していた奥川投手に「もっとちゃんとしろ」という懐かしい声の檄が飛んだそうです。中学校時代の野球部の恩師・石川宇ノ気中学校で理科を教える福島先生でした。小学校から野球を始めた奥川投手はわんぱくで，先生によく叱られたそうです。大人の指示を聞かずにマウンドでふてくされた態度をとったこともあったそうです。技術だけ教えて親身になってくれない大人を信用できなかったんだそうです。中学校２年生の時，福島先生が野球部の監督になりました。野球経験はゼロ。しかしながら，手がまめだらけになるまで毎日ノックをしてくれたそうです。「ここまで尽くしてくれる大人を初めて見た。福島先生の本気を受け取って，下手くそなノックを部員全員，全力で捕りに行った」そうです。福島先生率いる宇ノ気中学校は奥川という自分より周りの特に裏方の人間を大事にする大投手を擁して次の年全中で優勝しました。「もっとちゃんとしろ」と言われた次に福島先生から「お疲れさん」と声をかけられ「支えてくれる人，心の底から応援してくれる人がいて野球ができる」と改めて思い，こみ上げるものを止められず，奥川投手は閉会式でずっと涙が止まらなかったそうです。本当の人間力を兼ね備えた奥川恭伸投手を応援したいと思います。２４勝無敗で海を渡り，現在米大リーグで活躍中の田中将大投手や高校の大先輩にあたる松井秀喜さんのような世界的な選手になる予感があります。５打席連続敬遠されても腐らなかった松井さんや決勝再試合で敗れた相手を笑顔で称えた田中投手の高校時代にも同じように「溢れる，本当の人間力」を感じたからです。